

ふるさと風

第64号 (2011年9月)

風に吹かれて (43)

白井啓治

『寝転んで目を凝らせば 青空に羽虫が一匹』

「目守れば(まもれば)花のきれい」と以前に詠い呟いた事があつたが、高くなってきた青の天空を見上げて目を凝らすと、小さな羽虫が黒い点になって青空に糸を引いて飛んで行つた。何の虫かは分からない。秋に追われて夏を逃げ出そうという虫なのか、秋と一緒にやってきた虫なのか天空を映した吾が視角を走って横切つて行つた細い黒糸であつてみればそれを知る術もない。

近年とみに季節の移ろいの弱さを感じるのであるが、だからと言って四季が無くなつてきたわけではない。冬と夏に挟まれて春と秋が、ある種グレイゾーンのような形で存在している。そのグレイゾーンとは一般に認識されているものとは違い実に多彩過ぎるグレイゾーンで、曖昧さがない。曖昧さがないグレイゾーンなんてあるのか、と反論されそうであるが、春秋のグレイとは色彩の多彩過ぎて一つに決められないというグレイなのである。

解るようで解りにくい話であるが、暑い・寒いとはつきりと体感できる夏冬に挟まれ、明確に線引きの出来ない季節が春と秋である。それで私は、

春秋を多彩過ぎるグレイゾーンの季節だと思つている。

さて、世の中には揺るぎ有るものと揺るぎ無いものがあるが、揺るぎのないものの代表格が過ぎた時を示す歴史であろう。現在起こっている事象の事実を暦として未来に残すのが歴史である。

歴史というものは過去の揺るぎのない事実を示したものであるが、遠い過去の事実であるから明確に確定して言えることが少ない。そのため歴史には嘘や捏造が生まれてくる。特に日本の歴史は、過去を利用する為に大きく歪められてきたり、捏造という嘘の衣を着せられているものが多い。そして、それらの歴史を真実のこととして、そこに利権を得ようなんてことも少なくない。

当会の打田兄が、歴史の嘘に着目し、それをテーマに長編作品を書いておられる(本会報に連載)が大変興味深く、早い完成が待たれる。

当会は「歴史・文化の再発見と創造を考える」を軸に会員各自の思いや考えを会報に出しているのがあるが、編集責任者である私は、歴史の研究が好きではない。歴史書などを読むのはある意味厭なのであるが、物語作家である以上読まないわけにはいかない。何故なら、ストーリーというのは好き勝手に書くことは可能なのであるが、

そのストーリーが物語りとして成立するためには、揺るぎのない背景が必要となる。揺るぎのない背景とは、いわば「歴史(時代)」である。ぐらついた背景で物語を展開すると、その物語は人間不在の単なるストーリーの転がりだけになってしまうのである。物語とはそれがどのような内容形式で書かれようとフィクションである。ドキュメンタリーとしての物語であつても、ある事実を基にして作者が自分の考察をもつて書くのであるから、厳密にはフィクションである。しかし、いかに

ふるさと風の会会員募集中!!

当ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。
○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

フィクションであっても揺るぎ無い背景の前で人間を語っていけば、文学としての真実の物語になるのである。

SF物語、現代物語、歴史物語を創作する場合、すべてに共通して必要になるのが背景考証（時代考証）である。背景考証が確りできていけば、ある程度のご都合主義にストーリーを転がして行ったとしても登場人物は生きた人物となり、人間を表現する物語となるのである。

常陸国風土記の信太郡の条に、ここは本は日高見の国といった、と出ているのであるが、この地石岡に来て日高見の国を言う人も日高見国のことを検証する人にも出会う事がなかった。しかし、一度何処かでこの日高見の国をモチーフにした舞劇を書くかと思っていたのであったが、陸平をヨイシヨする会の方たちとの交流を持つようになり、何時かではなく早急に舞劇を書いてみようと思いつき、打田兄に「日高見国考」をまとめて頂いた。背景考証をこのように依頼することが出来る方が傍にいてくれることは非常に心強い。

真面目な打田兄は、自分の「歴史の嘘」を後回しに、早速日高見国に関する打田資料をまとめてくださった。興味深い考察なので、私の独り占めにしては申し訳ないので、この会報に何度かに分けて紹介していきたいと思う。

常陸国風土記は、征服者側からの都合を、古老の曰くとして語られているのであるが、都合の隙間に真実が見え隠れしている。古代とそれ以前のことはこの風土記の隙間に読みだす以外方法がないのであるが、この地の人達は、どうもそのことを無視している様で仕方がない。

日高見国(ひだかみのくに)考(1) 前篇 打田昇三

司馬遼太郎先生が「歴史と小説」と題したエッセイ集に「なぜ、歴史小説を書くのか？」と質問された答えらしき小文を書いておられる。「難しい質問」と冒頭に述べられたが、これは質問したほうに問題があると思う。先生は「対象となる人物が後世に与えた影響を書くには、歴史小説しかない」と言うような意味の所感を述べられた。それを考えれば、歴史は現代に何らかの影響を及ぼす過去の鏡と言えるのであろうけれども、誰も多忙なので(何をすれば良いか迷っての多忙もあり)一般には「歴史など、どうでも良い!」と思われている。

それが当たり前になると貴重な遺跡が破壊されたり、由緒ある場所の地名や伝説が失われたりする。「現在は直ぐに過去になり、歴史となつて残る」ことを誰もが忘れてしまうと人間は反省心を失い、それはやがて社会の荒廃に繋がる懼れが出てくる——余計な心配かもしれないが……

そうした中で美浦村に在る「陸平(おかだい)遺跡」は、明治十六年に日本人が初めて発掘した貝塚として知られるけれども、美浦村文化財センターの管理と並行して、地元の方々が「陸平をヨイシヨする」大切にする、会(会長・市川紀行さん)を結成し多岐に亘る活動で遺跡の保存と啓蒙に努めて居られる。この遺跡には、年代は不明ながら地元の長者屋敷が置かれていたという記録がある。積極的な保存活動が無ければ貴重な遺跡も次第に私有地化し、失われてしまうのである。それを防ぐのは「歴史を大切にする地元の人々の熱い心」に他ならない。

古代の美浦村は「常陸の国の信太郡」に含まれ

ていた。大化の改新で始めて置かれた常陸国の大昔を記録した史料は「常陸国風土記」しかない。

野心家の藤原宇合が国司で居た時代に編纂したと伝えられる此の史料は「藤原一族の手前味噌」で、かなりの脚色(自画自賛)が施されたものと理解されるけれども、編集の主眼を「古老の相伝、旧聞、異事などを収録すること」に置いたらしい。つまり、言い伝えなどを中心に作られているから記事を鵜呑みには出来ない反面で昔々を推定し、想像するには都合の良い記録かもしれない。

少し回りくどくなることをお許しただいて、当時の状況を示す必要があるので、出版されている風土記の記事を部分的に引用する。

常陸国風土記 信太の郡 東は信太の流海、

南は榎浦の流海、

西は毛野河、

北は河内の郡なり。

(流海はうみ、現在の霞が浦であり太平洋から流入していた。鹿島、香取両神宮は流海を隔てて対岸にあったことになる。江戸崎付近が榎浦流海、美浦村東部・北部及び稲敷市東部・北部は浮島を除き信太流海と呼ばれていたようである)

古老の曰へらく、難波の長柄の豊前の大宮に天下の知らしめしし天皇の世、癸丑の年に、小山上物部河内、大乙上物部会津等、総領高向の大夫に請ひて、筑波、茨城の郡の七百戸を分かちて、信太の郡を置き。此の地は本の日高見の国なり。

(おきなはいえらく、なにわのながらのとよさきのおおみやにあめのしたしらしめしすめらみこと
|| 孝徳天皇 のよ|| 大化の改新の頃 みずのとう
|| 白雉四年・六五三年に、 しようせん
|| 十九あつたうち中間の位階 もののべのかわち、 だいいつじょう|| 一つ下の位階 もの

のべのあいづら、そうりよう東国の長官
たかむくのまえみつき後の位階では四位程の高
官にこいて要望して、つくば、うまらきの
こおりの七百こをわかつて、しだのこおりを、
おきき。このちはもとのひたかみのくになり

郡の北十里に碓井あり。古老の曰へらく、大足
日子の天皇、浮島の帳宮に幸し給ひし時、水の供
御無かりき。すなわち卜者をして訪占はしめて穿
りし所、今雄栗の村に存れり。—中略—榎の浦
の津には、すなわち駅家を置く。東海の大略、常
陸路の頭なり。所以に傳駅使ら、初めて国に臨ま
むとしては、まず口と手を洗ひ、東に面きて香島
の大神を拜み、然して後に入ることを得るなり。

(こおりのきた十りに當時の一里は約六七〇米、
うすいあり。おきなのいえらく、おおたらし
ひこのすめらみこと景行天皇、うきしまのか
りみやにみゆきしたまひしとき、みずのおもの
天皇に出す水、なかりき。すなわちうらべを
してうらどはしめてほりしところ占い職に場所
を示させて掘った場所が、いま、おぐりのむら
にのこれり雄栗を若栗とする説があり、また水
が出た場所は「陸平」とする説もある。—中略—
景行天皇は、息子の日本武尊とペアで実在が最も
疑われる人物らしいから、外させて頂くとして、
当然ながら「浮島に来た」というのは大和王朝か
ら派遣された武将であつたらう。未開発の地を天
皇が気楽に回れる筈が無い。

えのうらのつには、すなわちうまやをおく榎
浦津駅は龍が崎又は江戸崎と推定されている。
「津港」うまや公用の乗り換え馬が置かれて
いた。とうかいのおおじ、ひたちぢのはじめな
り。このゆえに、はゆまづかい早馬を乗り継

いで来る官僚、ら、はじめてくにのぞまんとし
ては、まずくちとてをあらひ、ひがしにむき
てかしまのおおがみをおがみ、しかしてのちに
いることをえるなり東海道の最後の国である常
陸に入るには海路・陸路とも榎浦の津が最初の地
になる。榎浦津の所在地が龍ヶ崎か江戸崎説なの
か確定されてはいないが、どちらになつても東の
対岸に鹿島神宮が祀られているため、公用で来る
役人たちは常陸国の入口でまず口を濯ぎ手を洗ひ
鹿島神宮の方向である東に向かつて拝礼をした)
さらに追加すると「風土記逸文」として分離さ
れている中には次のような記事もある。

常陸の国 信太の郡

常陸国風土記に信太の郡となづくる由縁を記し
て云はく、黒坂の命、陸奥の蝦夷を征討し、事了
りて凱旋り、多歌の郡角枯の山に及びて、黒坂の
命、病に遇りて身故りき。ここに角枯を改めて黒
前の山といひき。黒坂の命の輪輻車、黒前の山よ
り発でて、日高見の国に到り、葬具儀の赤旗と青
幡、交糺を懸はし虹を張り、野を

瑩し路を耀かしき。時の人、赤幡垂の国といひし
を、後の世の言にすなはち信太の国と稱ふ云々
(ひたちのくにふどきにしだのこおりとなづくる
ゆえんをきしていわく、くろさかのみこと、む
つのえぞをうち、ことおはりてかえり、たかの
こおりつのがれのやまにいたりて、くろさかの
みこと、やまひにかかりてみまかりき。ここに
つのがれをあらためてくろさかのやまといひき。
くろさかのみことのはふりのくるま、くろさか
のやまよりいでて、ひたかみのくにいたり、
はふりつもの、あかはたとあおはたと、まじ
はりひるがへりて、くもをとばしにじをはり、

のをてらしみちをかがやかしき。ときのひと、
あかはたしたりのくにといひしを、のちのよのげ
んにすなはちしだのくにといふうんぬん)
ここでは「信太の郡」の名称の由来に「黒坂の
命」を登場させている。黒坂の命は「茨城の郡」
でも名称の由来となつた「茨棘(いばらのとげ)」を
利用して先住民族の山の佐伯、野の佐伯を攻め滅
ぼしたとされる人物である。攻められた佐伯は酷
い名前「国巢(くす)」と呼ばれている。

「蝦夷」の、と言うより古代東北地方の研究で
知られた東北大学名誉教授の高橋富雄先生のお説
では、大和朝廷に迫害された人々を「蝦夷」と表
現するようになったのは比較的新しく大化の改
新ごろだそうであるから、バラ・トゲ時代に常陸
国へ侵略して来た人物が「蝦夷征討」を行ったと
いうのは眉唾記事になる。常陸国の昔を伝える唯
一の書とも言える「新編常陸国志」にも「黒坂
命は何れの時の人なるかを知らず、又何人の裔孫
なることを記さざれど、思うに天津彦根の胤にて、
崇神の朝に仕へ」と書いてある。

昔の小学校の運動会ではあるまいし、赤旗や青
旗を靡かせて葬式をしたという記事は嘘っぽい
が、ここで重要なのは「信太の郡が、かなり古い
時代から日高見国と呼ばれていた」ことである。
しかしながら常陸国風土記に記載されたこれらの
項目と言うか「日高見国」については多分、一般
の方には興味を持って貰えず、また知られても
ないように思える。引用した常陸国風土記の該当
部分には、強調の意味もあつて傍線を付した。

その「日高見国」とは何か？常陸国風土記の記
事を素直に解釈すれば「信太の郡は、かつて日高
見の国(ひたかみのくに)と呼ばれていた」と云う

ことであろう。日高見は読んで字の如く「日高」日が高く「見える」ことで、周りが開けていて太陽（多分、日の出？）が輝かしい場所になる。分譲地やマンションの広告ではないが、そういう土地は日本中に幾らでも在る。

平成の大合併で消える前には「日高」と名乗る町が埼玉、和歌山、兵庫などに在ったが、昔からの名称だったのかどうか：また北海道の南部、歌で知られた「襟裳岬」を南端としてほぼ北に走る「日高山脈」の西側は「日高地方」と呼ばれていて競走馬、昆布、鮭などの産地であるが、そこが「日高見国」だと思われているらしく一般に日高見の国＝北海道とする答えが多い。

さらに群馬県高崎市には弥生時代後期のものと考えられている関東地方最古の水田遺跡があるが、その名称は「日高遺跡」という。序に触れておくと、稲作は西から伝わって来たように思われているが、九州王朝説の古田史学の会で出された著書に依れば、弥生時代の稲作について：

① 西日本の稲作は東北地方に伝わらなかった。

② 東北の水稲稲作は朝鮮半島やロシア（沿海州）から伝わった。：

とする研究を会員の方が発表されている。日高遺跡の稲作は多分②のルートのもので西暦一〇〇〇～二〇〇〇年と推定されており、青森県弘前で発掘された稲作遺跡が紀元前三〇〇年～前二〇〇〇年なので関東には数百年かけて北から伝わったらしい。

日高見国に戻って、一般的な辞書には「日高見国＝古代の蝦夷地の一部、北上川の下流地方、すなわち仙台平野に比定：」として「日本書紀」の中の景行天皇紀を根拠にしている。「日高見国とは

東北地方の古代名称である」とする説は歴史学に關わる方々に根強いようである。

そうした中で、地元の茨城県はどうかと言えば既刊の「茨城県の歴史」などには触れていないが「茨城県地名大辞典」には日立市の西に連なる多賀山地の東麓に「日高」の地名があり、其処がかつて「日高見の国」の境であった：とする日立市史の記録を紹介している。歴史は行政の姿勢一つで残ったり消えたりするという例である。さて、そうなる常陸国風土記の立場はどうなるのか？

既に述べたが、景行天皇は何とも行動が怪しい天皇である。息子の日本武尊に「兄を呼んで来い」と命令したところ兄は素直に応じなかった。そこで日本武尊は兄を簡単に殺してしまった。その兇暴性を恐れた天皇は、日本武尊に命がけの困難な遠征をさせるように命じて遠ざけた。ところが、その日本武尊が死んだら、景行天皇は、それを偲んで日本各地を回って歩いた？：冗談も休み休み言つて貰いたい：「魏志倭人伝」との関わりで実在が考えられる「倭の五王」など、いわゆる古代の天皇の中に景行天皇は入っていないらしい。

神代の記事は細かいことに目を瞑るとして、邪馬台国時代が過ぎて古墳時代が始まる頃に九州王朝か、出雲王朝か、何れかの勢力が武内宿禰という武將を東国から北陸方面に派遣して先住民族の狀態などを偵察させたようである。疑いたくはないが、この武内宿禰というオジさんも日本武尊と同様に計算の合わない人物である。因幡国風土記には仁徳天皇時代に因幡国へ隠居したのだが、或る日、靴を残して行方不明になったとしている。自殺者が履物を揃えて残すのは、それを見習つてのことであろうか：景行天皇から仁徳天皇までは

間が離れているから何とも言えないが、武内宿禰が因幡国へ行ったのは、この人が出雲王朝系の武将だったことを暗示していると思う。

勝手な推測をすれば、其れ迄の出雲系王朝が衰退し、替わつて新興勢力の大和王朝の東国進出が開始される時代になったのであろう。いずれにしても武内宿禰は何処を回つたか、何人で行つたか、期間ほどのくらいだったか、極端なことを言えば、旅費だけ貰つて？本当に回つたか？などは不明だが、ともかく無事に帰つて来て報告書を出した。その中に次のようなことが記されていた。

「東夷の中、日高見国あり。その国人、男女並びに椎結、身を文けて、人となり勇み悍し。是を総べて蝦夷と曰う。また土地沃壤えて曠し。撃ちて取るべし」

（あずまのひなのなか＝東方の辺境に、ひたかみのくにあり。そのくにびと＝住民 だんじよならびに＝男女共に かみ（髪）をゆいあげ、みをもとろげて＝刺青（入墨）を施して、ひととなり＝性格 いさみたけし＝勇敢である。これをすべて「えびし」という。また、とちこえてひろし＝豊かな地である うちてとるべし）

「撃ちて取るべし＝征伐すべし」は侵略者の野望が剥き出しの文章である。武内宿禰が言ったのかボスが考えたのか、これにより正体不明ながら日本武尊に擬される大和朝廷の複数の武將たちによる東国遠征が開始されたらしい。この中で「入墨」は世界中の古代の人々が彫っていたようであるに宗教的、裝飾的、呪術的な目的が言われているけれども、私見だが海に潜つて漁をする場合などの護身用の意味（鮫除けなど）を推定している。当時の霞が浦には怪しい魚も居たであろう。

是まで述べてきたことを要約すると「常陸国風土記」に「信太郡は元の日高見国である」と書かれているにも関わらず、日本各地に日高見国があり然も地元の常陸国では「日高見国」の存在すら忘れ去られてしまっている…ということになる。冒頭に述べたように、歴史喪失の初めは県民・市民の無関心に始まる。日高見国が各地に存在するため、歴史的には重要ではないように思われているが、これがそうでは無いことが分かってきた。

(前篇終わり)

クジラとナマズ

鈴木 健

「りゆうぐうのつかい」という公式名を持つ魚がいる。それは、英語圏でリボンフィッシュと呼ばれているように、リボンのように綺麗で細長く、全長は10mに達するらしい。深海性の魚で、全世界に分布する。日本海側では山口県から佐渡、太平洋岸では鹿児島県から鹿島灘の間で稀に海岸に打ち上げられることがあるという。海辺の人たちは、それを竜宮からの使いと見て、人間に何か重要な知らせを届けに来たと考えたに違いない。漂着後あまり時が過ぎないうちに地震や津波が起きれば、誰もが、あれは海底の異変をいち早く察知した竜宮からの緊急連絡であったかと納得したことであろう。それが、たまたま、2009年2月に鉢田海岸で発見された。現在それは、大洗の水族館に展示されているが、全長は3m弱。2月28日(以下月/日)には茨城沖を震源とするM4.9の地震が起きている。また、同年12月十九

里浜に大量のイワシが打ち上げられたが、同月17日から20日にかけて伊豆地方沖震源M5.0の地震が発生している。とはいっても、相互の関連性を示すものはない。

問題は今回の3/11大震災だ。3/6の朝刊は一斉に鹿嶋市下津海水浴場への鯨の大量接岸を伝えた。特定された鯨はカズハゴンドウクジラ(以下カズハ)、外洋性で熱帯・亜熱帯に棲息。各紙の記事を総合すると、4日夜、浅瀬に乗り上げている74頭を確認。身長2~3m、体重200kg以上。うち22頭は折から大潮の満ち潮に乗って海に戻り、5日朝には死亡30頭、とり残されたものの22頭。地元や水族館職員が救出に務めたが、大部分は死亡したと言う。震災一週間前のことだ。しかも、3/11にはM9.0の本震に続き、M7.7の茨城沖震源、M7.5の三陸沖震源、4/7にはM7.1の宮城県沖震源の大型余震が発生している。3/4の異変は果たしてこれらの前兆だったのか。実は、2002年2月25日にも、隣の神栖市(当時波崎町)海岸に82頭が打ち上げられた。そして、6月に茨城県南部で震度4、10月に青森県野辺地町で震度5弱、11月に宮城県北部で震度5弱と、つぎつぎに地震が起きている。これらの関連性はどうか。

鯨はリーダーに追従する習性がある。超音波を発して泳ぐ方向や餌の位置を確かめる。研究者たちは、「餌を求めたか、シャチに追われたかで浅瀬の鹿島灘等に接岸し、リーダーが砂浜に超音波を吸収されて方向感覚を失ったのではないか」と見る。だが、時季がいずれも2、3月ということに着目したい。熱帯・亜熱帯性のカズハの群れが、餌物を追いかけて黒潮に乗って北上する。しかし、

この時季には沿岸の水温10度という親潮が銚子沖まで南下している。深追いたカズハたちが急激な水温の変化に変調をきたしパニックを起こすことはないのだろうか。いずれにしても、地震と直接の関係はなさそうだ。しかし、動物の異常行動の原因は一つに限らず、いろいろなケースがありうるはず。例えば地殻の変動。大地震はいきなり発生するのではなく、それに至る間にさまざまな地殻の変動があるはず。鯨であれば、それを音波や超音波として感じ取ったり、磁場の乱れの電磁波を敏感にキャッチし、リーダーが暴走する場合もありうるのではなからうか。鯨の迷入の原因として、100回のうち1回でもこのような地震の前ぶれが該当するケースがあるとなれば、それによって、どれほどの人の命が助かるかわからない。そうであれば、動物を馬鹿にしないで、共同でデータを蓄積し、謙虚に研究を進める価値があるのではなからうか。

それはそうとして、駄稿を打っているうちにあらぬ空想の世界に入り込んだ。カズハたちが大挙乗り込んできた下津(オリツ)浜は鹿島神宮からは直近の海岸である。鹿島神宮といえは地震鎮圧の神。しかも、下津と言うからには神体が「浜下り(はまおり)」をする津ではなからうか。茨城では各地で神社の神体の浜下り行事が行われている。カズハたちは、そこへ行けば鹿島の神に直訴でき、大地震から人々を守ってもらえんと考えたのかも知れない。しかも、同社はエミシ(縄文系在住民) 征服を担ったタケイカツチが祭神であり、珍しい北向きの配置は彼らに睨みをきかすためだということになっているが、中に居る神体はつねに下津の

方を向いているのだ。しかし、命をかけての直訴にもかかわらず、鹿島の神は願いを聞き届けてはくれなかった。鹿島の神は一体なんだったのか。

常陸の国はそのむかし、狩・漁・栽・拾でくらす縄文系在住民の天国であり、鹿島はその聖地ともいえるところであった。そこを制圧したヤマトは強暴なタケミカツチを鹿島神として送り込み、住民に睨みをきかせた。要(カナメ)石は地下にもぐって抵抗する住民を押しさえつける文字どおりの重要な石とされた。やがて、地震を彼らの復讐の前兆と考え、それを起こすものを締め付けようとするにいたったのではなからうか。

地震を起こすものはなにか。時代は下る。槍玉にあげられたのがナマズであった。地震とナマズの結びつきのもとも古い例は「ふしみのふしんなまつ大事にて候まま、いかにもへんどう(面倒)にいたし申すべく候」との秀吉の伏見城普請の書状(1592)であるという。鯨川地震に対しても大丈夫な城普請にするようにと奉行に命じている。ここで地震とナマズはつながるが、鹿島とは結びつきがない。1662年の寛文近江若狭地震に遭遇した浅井了意は、その体験を記した『かなめいし』の表題の由来を、つぎのように書いている。「竜王いかる時ハ 大地ふるふ 鹿島明神かの五帝龍をしたがへ 首尾を一所にくぐめて 鹿目の石をうちをかせ給ふゆへ いかばかりゆるとても人間の世界はめつすることなしとてむかしの人の歌に『ゆるぐともよもやぬけじのかなめいし かしまの神のあらんかぎりハ』この俗歌によりて 地しんの神の記を記しつつ 名づけて要石といふならし」。龍が怒ると地震が起きるが、鹿島神がその龍を服従させ、首と尾を一緒に打ち通してしまつたので、ど

んなにゆれてもぬけないから、この世は大丈夫ということで、本の名前を「要石」としたということだ。この時点では、鹿島神が地震の張本人として要石で押さえるのは龍であつて、ナマズではない。鹿島と地震はつながるが、ナマズとは結びつかない。

では、ナマズと鹿島との結合はいつからか。ナマズは琵琶湖を中心に関西で繁殖していたが、関東で見られるようになったのは、江戸時代中期である。したがって、それが鹿島とつながるのは、当然それ以降ということになる。当初は噂話であつたろうが、目に見える形で伝わり始めたのは、1853年2月2日の小田原大地震のあとに出版されたかわら版『相州箱根山小田原城下大地震之図』といわれ、鹿島大明神が要石を用いて地震ナマズを押さえる様子がえがかれている。江戸で爆発的にひろまつたのは、1855年10月2日の安政江戸地震の直後から出まわつた多色摺り木版の浮世絵『鯨川(ナマズ)』そのはしりに、「鹿島大明神の身内にて磐石太郎(※坂東太郎と要石に引掛けたいしずる」と名乗る人物が鯨川主(頭が坊主、体がナマズ)にまたがり、首根っこに要石を打ち据えている『志ばらくのそとね』があつた。今、地震を起こしたナマズをこらしめているから、罹災して家を失つた方々もしばらくは外寝で辛抱してください。というところであろうか。そのほか、『鯨川を押さえる鹿島大明神』『おそろ感心要石』等、地震を起こした鯨川をこらしめる構図。震災復興で恩恵を受けた土方・大工・鳶の職人たちが鯨川に餅をご馳走する『三職よろこび餅』復興事業でもうけた職人は笑い上戸、大損をした金持ちは腹立ち上戸、震災で客を失つた芸者を泣き上戸とし

て画いた『流行三人生酔い』、同様なモチーフによる『鯨川と職人たち』『富(者)は屋を崩し、職(人)は身を潤すとハ』など250種もの鯨川絵がアンダラ出版されたという。そこで鹿島に期待されていたのは、鯨川を暴れさせないよりも、暴れた鯨川を懲らしめることであつた。さらに昂じて、現今の地震観からすれば不謹慎極まりないが、身一つで生き、地震で失うものは何もない、何が来てもこわくないという楽天的性。壊れるのは金持ちの蔵屋敷で、自分らは修復の手間稼ぎができるという、ひごろの鬱憤晴らしと期待感。それに世直し願望や、罹災者への元気づけ。そのような江戸っ子気質が鯨川ブームに火をつけた。

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

- 9月11日(日) 里山と風の音コンサート
- 9月18日(日) チャン・ディンゴ ギター・リサイタル
- 10月2日(日) 長谷川きよしコンサート
- 10月9日(日) 小川由美子 & SONOROSA ジョイントコンサート
- 10月23日(日) 小原聖子モデルコンサート & マスタークラス・ワンレッスン
- 10月29日(日) フラヴィオ・クッキ ギター・リサイタル
- 11月3日(日) ジョルジュ・ミルト & 宮下祥子コンサート
- 11月5日(日) 福田進一ギター・リサイタル
- 11月23日(水) アンドレイ・パルフィノヴィッチ・ギター・リサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎ 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

やがて、「瓢箪鯨」も出まわる。軽くツルツルしたヒョウタンで重いヌルヌルしたナマズを押えられるかという事で、ヒョウタンは幕府、ナマズは黒船であったり、大塩平八郎に代表される町民であったり。やるならやってみると権力をからかっている。

一方、地元ではこらしめよりも、押さえつけを鹿島神に期待していた。出典は忘失したが、鹿島の神様は地震を起こさぬように片手で鯨を抑え、他の手で握り飯を食べるので、人間は必ず両手で握り飯をたべなければならぬと言われている。貴重な米飯をこぼさないための俚言でもあり、私の幼児期の記憶にもそれがあつた。

そしてアイヌも同じような認識を持っていた。「地震は地中に住んでいる大魚(地方によってはアメマスともアカエイともカジカとも云う)が身動きすると起こる。それでこの世を造つた神様(コタンカルカムイ)は、この魚が動かぬように、その頭に金串を刺していつもそれを左手で押さえており、食事する時も傘を冠つたまま右の手だけでする。そこでコタンでは冠りものをしたまま食事したり、碗を下においたまま片手で箸を使って食ったり、或いは片手を床につけてそれによりかかって坐つたりするのを、かたくいましめるのである。それを見て神様が安心して手をゆるめる恐れがあるからである。」『知里真志保著作集』平凡社

「コタンカラカムイがこの地上世界をつくる前に、ただ一面のどろの海に、ただ一匹の大きなあめますがおつた。大きな大きな、途方もなくどにかいあめますが、どろ海の中に姿を隠して、うとうと眠りこけておつたのだ。それを知らぬコタ

ン・カラ・カムイは、よい土地を見つけたとばかり、島づくりにかかった。大きな島をどっかりと背負わされて、あめまずはおこつたのなんの、おれさまに、断りもなしに、なんとかってなやつめ。そうして大あばれをやらかすもので、この地上に地震が起きるようになった。この世界はあめまずの上につくられたから、あめまずは、モシリニツケウチエブ(島の腰骨の魚と名がついたのだ。『日本の民話』(角川書店)より)

アメマスはアイヌ語で【mosirikewechep 背中に世界が乗っていると想像される魚】(バチエラー『蝦和英三対辞書』国書刊行会)で、語源的な意味は Mosiri 島、国土、世界、ikewe 腰、背骨、chep 魚。日本では鯨。ともに地震を起すことになる。

ちなみに、「鹿島神」のルーツと考えられる語彙に、アイヌ語【shikashimatkamuy 大いなる天の女神】(チュネール・タクサミ他『アイヌ民族の歴史と文化』(明石書房)があり、縄文語に遡るとみられる。語源解は①大きなkasiその上のmat女kannyu神。日本語になってシカシマカミ。漢字をあてて、鹿島神。鹿はカとも読むのでカシマ神。ヤマトに制圧される前の鹿島は、大いなる天の女神が母の愛で見守る縄文系在住民の樂園であったか。天照大(女)神の意味もこのシカシマカムイ 大いなる天の女神に似過ぎている。

なお、鯨絵や江戸文化の手ごころな読み物に、筑波書林ふるさと文庫版『鯨絵新考―災害のコスモロジー』(気谷誠)があります。

人類誕生のふるさと

菅原茂美

現在、世界70億人の人類の祖先は、一体どこで生まれ、どんな旅路を経て、今日に至ったのであろうか？ 今日の繁栄に至るまでの道筋は、想像を絶する苦難の旅路であつたに違いない。幾度、絶滅の危機をくぐり抜けてきたことやら……。

今月は、東日本大震災に誘起され、そのくぐり抜けてきた過去の「危機」と、世界へ拡散した、道筋を辿ってみた。

人類の発祥地は、アフリカ大陸東部のサヴァンナである。アフリカ大陸は、世界6大陸のうち、第2番目に大きい大陸であり、世界陸地の22%を占める。面積は3024万平方km。大陸にはその4分の1を占めるサワラ砂漠があり、54か国、約10億人が居住する。

さて、地球に生命が誕生したのは、40億年前である。10億年前には初めて多細胞生物が出現し、6億年前、「動物」が誕生する。そして、2億年前、恐竜全盛時代に、チヨロチヨロ這いまわるネズミ大の「哺乳類」の元祖が誕生する。そして7千万年前には「霊長類」誕生へ、その霊長類の中から2千万年前、大型類人猿が生まれ、最後に、チンパンジー・ボノボと枝分かれし、700万年前「ヒト科」(アウストラロピテクス)という、直立2足歩行する人類の原型が独立する。しかし、今日の人類に直結した系統以外は、ネアンデルタール人・北京原人などのように、進化の途中で滅亡していった仲間がある事を忘れてはならない。

【古生代後期(およそ2億7千万年前) 地球上の陸地は、「超大陸」(パンゲア) 1個のみであった。それが中生代(2億年前)になると、パンゲ

アの南北中間あたりに「古地中海」という割れ目
ができ、パングアは南北2個の大陸に分割する。
北側は「ローラシア」といい、ユーラシア・北米・
グリーンランド等を含む。南側は「ゴンドワナ大
陸」といい、アフリカ・南アメリカ・インド・南
極・オーストラリア大陸などを含む。

そしてゴンドワナ大陸は、1億5千万年前、先
ず南極大陸と「その他」に分かれ、更にその他は、
南アメリカ・フロリダなどが分かれ、次いでオー
ストラリア・インド・マダガスカル島が分裂し、
現在のアフリカ大陸が元の位置に残った。インド
亜大陸はインド洋を遙か北上し、ユーラシア大陸
に衝突、造山運動でヒマラヤ山脈が生まれた。こ
れがドイツの気象学者アルフレッド・ウエゲナー
が唱え（1912年）、後、肉付けされた「大陸移
動説」である。そして、大陸や大洋底は、十数枚
の、厚さ約100kmの岩盤の上に乗る、水平方向
に運動し、地震・火山噴火・造山運動を起こす：
とするのが、プレートテクトニクス理論である。】
しかしその大陸移動は、今も止むことなく続い
ている。太平洋のど真ん中のハワイ諸島は、年間
約8cmの速さで、ユーラシア大陸に近づいている。
そのうち、茨城県ハワイ郡ホノルル村なんてこと
も…。そして、大子町あたりに、超華麗な、ミニ
富士山なんかが出来たりして…。

となり、大陸は東西に分かれようとしている。
大地溝帯は、幅30〜60km。亀裂は深く、世
界で2番目に深いタンガニーカ湖（1435km²）
第1位は1620km²のバイカル湖）、トルカナ湖・
ビクトリア湖・マラウイ湖などが連なり、亀裂を
形成する。

さてこれまで「アフリカ大地溝帯」にこだわっ
た理由は、正に「ここが人類揺籃の地だからである。
【ダーウインは進化論を唱え、宗教界から迫害
された。イギリスの権威ある学会は、人類の発祥
地が、野蛮なアフリカなどであるはずはない。少
なくともヨーロッパ。しかし、ライバルのドイツ
やフランスでも困る。当然優越民族の住むこのイ
ギリスでなければならぬ。というわけで、オラ
ンウータンの骨格に現代人の頭骨をすり合わせ、
古代の動物の骨などとともに地中深く埋め、ねっ
造した学者もいたという。若い学者などがアフリ
カで、古代人類化石の発掘報告などしようものな
ら、権威ある学会に叩きのめされ、落胆のうちに
葬り去られた歴史がある。妄執にとらわれた権力
者ほど、始末の悪いものはない。現生の全人類の
祖先は、アフリカ人である。それなのに皮膚の色
で人種差別し、黒人狩をして首や足を鎖で繋ぎ、
奴隷市場で競売した過去を、今のイギリス系の
人々は、どう思っているのであろうか。】

大地溝帯の西側には、ルウエンゾリ山地があり、
マルゲリータ山（5109m）・アレクサンドラ峰
（5105m）などの連なる高地があり、ミトウ
ンバ山地などが続く。そして大西洋で蒸発した水
蒸気は西風に乗る、大陸上空を東に進み、今のベ
タこれらの高地に到達すると冷やされ雨となって、
連山の西側は雨が豊か。しかし、この連山を超え

る雨雲は東側では少なく、大地溝帯の平原には雨
はあまり降らない。即ち平原は、サヴァンナとな
り、大きな樹木は少なく、灌木の生い茂る平原で
ある。およそ700万年前、森林が減ると、樹上
生活から、やむなく地上に降りた人類の祖先は、
立ち上がり、背伸びをして、草原の猛獣など、敵
を早く発見しようとして、ミーヤキヤットみたい
に後ろ足で直立し、警戒を怠らない。そうこうし
ているうちに、直立2足歩行が、効率よく移動で
き、空いた手に物を掴み、獲物など運搬が楽にで
きる。初期のうちは今のチンパンジーのように、
前足の指を握って歩くナツクルウオークを交えた
ヨチヨチ歩きであったろうが、そのうち、しっか
りした足取りで直立2足歩行が定着する。

人類の祖先は、発祥時といえども、特別の瞬発
力や敏捷性があるわけでもなく、それほど大きな
牙や鉤爪があるわけでもない。かといって、犬の
ような鋭い嗅覚・聴力・視力も、更に、毒を識別
できる鋭い味覚を持っているわけでもない。こん
な欠陥だらけの動物が、どうして猛獣がウジャウ
ジャいるアフリカで、種を絶やさず生き延びられ
たか？ 誠に不可思議である。

【丸腰に近い、ひ弱とも言える人類の祖先が、
いかにして過酷なサヴァンナで生き延びたか？
それは、徐々にではあるが、人類は大腦を発達
していったことと、大脳発達のために必要な栄養
を確保できたから…といわれる。

ヒトは体毛を失うことにより、汗腺が発達し、
獲物を追い、長距離走をしても、体温調整がうま
くいき、獲物を捕獲できた。体毛喪失↓汗腺発達
こそ、人類進化の原動力…とも言われる。

哺乳類にのみ「汗腺」があり、アポクリン腺と

エクリン腺の2種がある。アポクリン腺は人間より動物のほうに多く、分泌物は脂質が多いため、体臭などの源で、体温調節にはあまり機能しない。人間では、失われずに残った腋毛・陰毛にアポクリン腺が多く、体臭の発生源で、臭い付けや個体識別の手段であったと思われる。一方、エクリン腺は人間の皮膚に密集して存在し、分泌物は水分が多く、発汗により気化熱で体温調節機能が高い。

さて、あまり敏捷でもない人類は、いかにして、サヴァンナで狩りを成功させたか？ 人は、ヌーやシマウマなど比較的大きな草食獣を追い回したところで、到底逃げ足の速さでは敵わない。ガゼルなど小型の動物は、陸上最速のチーターさえも振り切る瞬間速度を持つ。単独のチーターや群れで狩りを行うライオンでさえ、狩の成功率は5%とも言われる。動物の短距離瞬発力は強力であり、とても、のろまな人間が勝てる相手ではない。

ではどうして、人類はサヴァンナで、動物の肉を手に入れられたか？ それは、動物に比べ、人間は長距離走が得意であった。即ち、人間は槍などを持って、しつこく、どこまで追いかけても、動物より先に、へたばることはなかった。人間はエクリン腺の発達により、体温を放出できるからだ。これには動物達もお手上げ。エクリン腺の発達していない動物は、長距離走は体温上昇で、必ず先にダウンする。人類は比較的大きな獲物を、思いのほか、容易に手に入れることができた。大脳発達に必要な豊かな栄養源確保。人類進化の基本は、体毛を失ったことだと言われる。

序でに人類の「メス」だけが唯一、なぜ排卵期以外の時でも「オス」を受け入れるのか？ しかも妊娠している時でさえも、オスを受け入れる。

他の動物には絶対にならないことだ。その答えは先に述べた方法で、優れた狩人のオスは、栄養豊かな肉塊を自分の好きなメスに、より多く提供してくれる。受けたメスは、この優れた狩人を、オメオメ他のメスに奪われてなるものか…という心理が働く。オスの本性は、DNAの命令により、実は特定のメスだけに縛られることなく、より多くのメスに子孫を残そうとする。そこで、メスは、何とかして、オスが逃げていかないよう、いつでも要求に応じる習慣が身についた。それが長い間に遺伝子変換を起こし、人間のメスの恒常的な生理として定着した…。と唱える学者もいる。】

* * * * *

さて話を戻し、結局は直立することにより、重い頭部を脊柱の上(アトラス)に乗つけることにより、長足の進化を遂げることができた。即ち、4足なら重い頭を体躯の前にぶら下げているため、脊柱から伸びた多くの筋肉が付着するための頑丈な頭蓋骨が必要である。1959年リーキー夫妻が東アフリカのオルドバイ渓谷で発見した原人「ジンジャントロプス・ボイセイ」の頭骸骨は、非常に頑丈なものであり、後の旧人の柔らかい頭骨への過渡期的のものである。薄く柔らかい頭骨は、後に道具や言葉を使うため、大脳容積が増加する余裕ができた。頭蓋骨が頑丈な骨で囲まれば、ここでは、大脳が膨らむ余地はない。

【もつとも、大脳を膨らましたことが人類にとって、幸福であったかどうかは疑問である。なぜならば、これまでも、私は何遍も述べてきたが、大脳の膨張は、欲望の膨張。その欲を満たす為、

人類はいかほど多くの非人道的な行為を繰り返したかは、歴史がはっきり示すところである。異常な物質文明の発展により、地球環境を汚染し、資源を枯渇させ、争いは絶える事なく、「盛者必衰の理(ことわり)をあらわす」ことになりそうだ。人類という種の寿命は、そう長くはあるまい。】

さて人類はそのアフリカ大陸で、類人猿の仲間から分離し、およそ700万年前、直立2足歩行を始めた。類人猿時代そのままに、4足歩行なら安定した姿勢であり、次に掲げる重い十字架を背負わずに済んだはずである。即ち頭部が脊柱の真上に乗つかるため、その重量が諸に7つの頸椎骨にのしかかる。そのため首・肩周辺が痛くなる。

そして頸椎が老化すれば、軟骨がすり減り、神経を圧迫し、「頸椎症」として、しびれや激痛などが走る。同じことが腰椎についても言える。上半身の重量をもろに骨盤の上に受け止める。悲しいかな腰痛は殆どの人が経験する重荷である。

(見方を変えれば、軟骨がすり減るほど長生きすること自体、生命現象の原則に反するのかもしれない。医療・栄養などの進歩により、人類の寿命は伸び過ぎたのかもしれない。アルツハイマー・動脈硬化・癌など発生する前に、次世代に命を託すのが、まともな生命現象なのかもしれない。野生動物は、大方、繁殖能力が終了する頃は、寿命を終える。)

更に「痔」は、もし4足歩行なら肛門部に静脈血が鬱血して、血液循環が滞ることはないのだが、神の意志に逆らって直立2足歩行など始めたものだから、下部(肛門周辺)に溜まった血液を心臓ポンプが十分に引き上げることができない。人類にだけ存在する「痔疾」は、地球の引力に逆らつ

て直立した「罰」のようなものである。

更に、足の関節痛である。本来体重を4本の脚が平等に分担すべきものを、これも2足歩行を始めたために、1本の足の負担は4分の1から2分の1と重くなった。おまけに空いた前足の「手」が、欲張って何やら荷物など沢山抱えるものだから、2本の後ろ脚にかかる負担は益々大きくなる。大方の人は、晩年足腰が弱り、2足歩行のプライドは、ついで去る。今度生まれ代わる時には、伊達や酔狂で、2足歩行などするもんじやない。猫のように柔軟で、周りにわれ関せず。天井天下唯我独尊。私は猫に生まれ代わりたい！

* * *

さて、無駄話が長すぎたが、人類は、これという生理・解剖上の武器も持たず、初期のうちには、大した道具も持たず、天敵で溢れかえるアフリカの大地で、よくも700万年も生き続けられたものだ。サヴァンナは乾燥地帯で、いつでもジュシーな果物など恵まれているわけではない。木になる果物は、立体行動に俊敏なサル共に先を越される。食べられる草や葉は、無数の草食獣に先にやられる。地下の根茎類は、鼻の利くイノシシなど先客の御馳走だ。川の魚など、のろまな人間に捕まるほど、ボンヤリはしていない。貝類も、うまく身を隠し、簡単には捕まらなかつた筈。

人類は猛獣と戦う前に、まず食糧確保で、ライバル達に恐らく敵わなかつた筈。飢餓こそ最大の敵。その飢餓に備えるために人類は、皮下や内臓に脂肪を大量に蓄えるよう合理的に進化した。それを今、ダイエットがどうのこうので、痩せよう

とするのは、これも神の意志に反すること。さて、サヴァンナには、餓えたライオン・豹・チーター・ハイエナなど、猛獣どもが身の周りにワンサといた。その隙間を狙って、食糧確保は、至難の技であつたらう。特に人間のオスは、彼女に十分な食糧プレゼントができなければ、子孫を残せない。

更に大きな危機は、周辺の火山の噴火である。噴火があれば、溶岩流など一面火の海となり、更に煤煙が立ちこめ、日光が十分地面に届かず、植物は繁茂しない。草食獣はいなくなり、獲物は減る。歴史上、火山噴火により、多数の種が滅亡した事実が、発掘などで証明されている。それに今回のような巨大な地震や、大津波などに襲われたら、一溜まりもなかつたらう。そして津波の跡など、伝染病や寄生虫病など氾濫し、幾度絶滅の危機に遭遇したことやら。更に異常気象で、旱魃や逆に洪水などで、生命が犯された危機は、何度でも繰り返したに違いない。

* * *

7月26日、肺炎のため、80歳で亡くなられた「日本沈没」のSF作家・知の巨匠・小松左京氏は、今度の東日本大震災について所感を求められると『自分で取材に行つてないので、コメント出来ない』と答えたという。

実は私も、人類が今日まで生き永らえた裏には、幾度も絶滅の危機に遭遇し、それをくぐり抜けてきたに相違ないと信じている。ならばその危機とはどんなものであるかを、ぜひこの目で確かめておきたいと常々思っていた。巨大地震・津波・火山噴火など、最大の危機であつた筈。それをこの

目で確かめずに云々するのは、極めておこがましいと思つていた。

長崎県島原半島の「雲仙普賢岳」は、1990年に約200年ぶりに噴火した。私は直後、是非その現実をこの目で確かめたく、見に行つてきた。その火砕流の後を見て驚愕した。電柱は上の方が1層ほど残すのみ。2階建の家は屋根瓦が残るのみ。谷幅数百メートル、長さ数kmにわたり、火砕流が谷間の集落を埋め尽くしていた。記録によると、この噴火で普賢岳は溶岩により130層も高さを増したという。地域の人々にとって、正にこの世の終末のように感じられたことであろう。

1995年の阪神淡路大震災の直後にも、私は直下型巨大地震というもののすさまじさを、この目で見ておきたいと思い、駆け付けた。死者数は6300人。負傷者数4万3千人。全半壊家屋数20万9千戸。神戸市内で阪神高速道路の高架橋やビルの倒壊。この世にこんなことがあり得るのかと度肝を抜かれた。密集都市の直下型地震とは、これほどまでにダメージを受けるものかと再認識させられた。文明の進んだ今日でも、こんなことが起きるなど想像もできなかった。そして自然の前で人間の築いた文明の儚さを、しみじみ感じさせられた。

そして今度の東日本大震災である。すでに、報道による記事から、記録として被害の実態を残しておかなければならないと考え、6月号に「未曾有の複合災害」として掲載した。しかし自ら被災現場を見ずして、調子込んで、記事にまとめるなど、後ろめたさを感じていたので、発生4か月後ではあるが、7月末、現場を見に行つてきた。現場でボランティア活動をしたわけではないが、寸

志の義援金と哀悼の意で、ご勘弁願いたい。

マグニチュード9という、超巨大地震。世界で100年に数回の発生頻度。それが今、何でここで?...。それに今回は、ヒューマンエラーによる原発事故まで引き起こした。多数の死者・行方不明者。神戸地震を遙かにしのぐ規模であった。更に放射能汚染による避難者。こんな複合災害が、同時に、広範囲にわたって発生するとは...

今回私が訪れたのは、親戚の見舞いもあり、塩釜港である。港は復興作業中で、立ち入り禁止ではあったが、岸壁の破壊状況などから、被害の状況はおよそ見当がつく。港を取り巻く住宅街は、鉄筋コンクリートビルの1階部分は、がらんどろで、見るも無残であった。普通の民家は跡形もなく流失・更地。所々に鉄筋のビルが残っているだけ。巨大なピラミッド型に瓦礫の山が残されていた。電柱の3分の2ぐらいのところまで、ビニールなど漂流物が捲きついていた。

流失した街はどう復興するのか？ 港湾は現在地に必ず復興するであろう。関係施設も同じこと。しかし、港湾周辺の民家や商店街は、以前の所に復旧すべきか、それとも、きつぱり新たに高台へ移転すべきか？ 莫大な経費を要するので、国を挙げて思案のしどころである。歴史は必ず繰り返す。子孫の安全のためにも英断をもって高台へ：これは口で言うのは簡単だが、実現の難しさに、頭を痛めるところである。

今回の震災は、日本人の頑張り、必ず復興するであろう。しかし太古のアフリカで、限界を感じたかどうか知らないが、人類は我慢や忍耐では進歩はない。過剰なまでの好奇心と、逞しい勇氣と挑戦で新天地を求め、7万年前、わずか150

人ほどでアフリカを飛び出した。アラビア半島で1万人ほどに人口が増えた時点で、スマトラ島の火山噴火のため、人口が半分以下になってしまった。しかし、ここでも、人類は逞しく生き延び、東方に進出したモンゴロイド、北方に進出したコーカソイド(白人)、再びアフリカに逆戻りしたネグロイド。それぞれの進出先で繁栄を極め、今日の世界70億人の基礎となった。

* * * * *

人類は、これまでのバカげたまでの物質文明繁栄に気付き、この地球の収容能力をしっかりと認識すべきである。環境汚染・資源枯渇で、仲間同士のケンカはもう止してくれ！ 地球が1・4個なければ、現状の70億世界人口を収容できないなど、智慧ある動物が取るべき態度とはいえない。適正規模に人口を減らし、資源は未来の子孫からの預かりもの：とはつきり認識し、つつまじやかに生きていくのであれば、種としての人類の寿命も、もう少し伸びるであろう。経済至上主義の世界競争など、いつまでナンセンスな戯れを繰り返すのか？ 人類も智慧ある動物と言われないのなら、自らをしっかりとコントロールすべきだ。

肉食の野生動物は、草食動物の数により、自らの産児数をしっかりと制限している。万物の霊長と言われないのなら、人類もカナダの森林狼の自律ある行動を見習うが良い。資源が不足すれば、集団は繁殖行動を、徹底的に自制するという。極限状態のサヴァンナで生まれた人類。多くの苦難を乗り越えて、今日の繁栄を勝ち取った。しかし、過剰繁栄で身動きできなくなる「愚」は、現

在の我々に課された緊急の課題である。決して先送りしてよい軽微な問題ではない。政党同士が、或いは国家間が、些細なことで目くら立てて、争っている時ではあるまい。40億年の生命の歴史を重くとらえ、環境汚染で全生物が存続の危機に曝される愚は、何が何でも避けなければならぬ。それが21世紀を生きる、我々全人類の最大の課題である。

三ツ谷河岸としいの木山 伊東弓子

この夏孫二人と炎天下の堤防を行った。暑いのに苦にならなかつたが匂いには驚いた。

「臭い、くさい」

「へんな匂いだよ」

と叫ぶ二人、私の鼻にもツーンと来た。これは水の匂いとすぐ分かった。水は黄緑の絵の具を流したように、コンクリートの堤防の辺りに漂っている。芦の影を写す水面にも不気味に流れている。これは川が苦しがつている様子に見えた。息することもできず死を待つ姿とも見えた。そんな状態の芦の影から白鳥の家族が近づいてきた。孫達の方へ寄ってくる。持ち合わせの煎餅を割ってやっただ。先を競って投げる方に一群が流れる。堤防を自転車で走り出すと、白鳥達も先頭の母親について子供達がいく。父親は少し離れて周囲に気配りしながらついていく。長閑な風景だが足も羽根も汚れていることだろうと気になる。時々芦の周りで葉を引っばって啄んでいる。丸で嘴の汚れをとりに除こうとしているようだった。御留川の話しや

対岸の名称、高崎から大井戸、川中子に至る迄の現代や昔の話をやりながら三人で走った。とうとう園部川迄行って白鳥と別れた。

帰り道は二人の後から行った。楽しそうだ。私は、ますます狭く浅くなつて行く川の現実を思った。沖州に砂浜が出来た。川中子から大井戸にかけてあさぎも根づかないと波止が広範囲に出来ている。平山地区には堤防にあたる波の勢いを弱める為、金網に石を入れて沈めてある。高崎のふかつぼは底深く、堤防のコンクリートが何回も沈むので、堤防のコンクリートを剥し、芝を植え石を埋めた。芦がぞつくり出て鳥の囀りもよく聞く。

高崎の恵比寿の川の水生植物帯造成工事が終わったようだ。細い苗が夏の日を受けて揺れている。川はますます小さくなる。沖の方で泥をとり除いているが、川は浅くなる一方だ。一度壊した自然はもう二度と戻らない。夕陽を背景に美しいと感動してシャッターを押しても、絵に描いても、句を詠んでも美しさは本物ではないと思う。午後になると風が強くなった。波はコンクリートに打ち当り、音を立てて泡をふく。川は苦しがつている。どうしてやったらいいだろう。と思うだけの小さな私。

その夜ふつと「玉里御留川」の本を開いてみた。人々の生活の場であり、働き生きてきた頃の川は元気で働きのある水が流れていたことであろうとその時代に思いを寄せてみたかった。今日見た向う岸に「三ッ谷」という所がある。そのの文書が二〇九ページにある。そこを食い入るように読んだ。

八四 寛延元年（一七四八）

宍倉村三ッ谷河岸常杭につき指図願

（口端書）

「寛延元年戊辰八月二十日 三ッ谷常かし杭立ル」

以書付致啓上候、然は宍倉内しいの木山御直割二罷成三ッ谷かし江おろし候所積立之節沖二而碇①を持不申難儀仕候由、依之常杭②老本立置

（申）度候由、左候得は北風ニも無難ニ被積申候段 高瀬之者共より申出候、然処御運上場③之儀引場江ハ障り申間敷候得共 為念御断申上候、それ共ニさわりも御座候ハ、一兩日中ニ三ッ谷江御出網引場④と不引場所之境江かり杭御立させ可被下候、御かしニは

□兵衛と申者付置候間委細此ものニ御指図可否下候

□啓其後は物遠⑤ニ打過申候、弥御勇健被成御座候ハんと珍重奉存候、早々 以上

八月十九日 玉里村 長七

富田村 惣衛門

御川守

喜一左衛門様

（鈴木悦郎家文書 卷七一・97）

八四

①…碇（いかり）船を留めておくために綱や鎖につけて水底に沈めるおもり。

②…常杭（じょうく）船を繋ぎ留めるための常設の杭。

③…御運上場（ごうんじょうば）宍倉村の御留川である五左衛門川。

④…綱引場 五左衛門川のこと。

⑤…物遠（ものとお）疎遠に。

【要旨】

しいの木山から榎薪を三ッ谷河岸に下した。そ

れを安全に高瀬舟へ積み込むための常杭を立てたいという要望が出ています。御左衛門川綱引場のさしさわりにならぬようにしたいので、御川守に立ち合って指図してもらいたい。

去年この場所を尋ねた日のことを思い出した。八木から坂を上って風返しに行つたことがあるので三ッ谷はすぐ分かった。大きな屋敷が四軒ある。それぞれ河岸をしていて下河岸、中河岸と言つていた。裏の田に河岸の跡が一段高くなつていた。八十代のお爺さんの話しによると土浦や高浜に負けない位三ッ谷も賑わつていたという。確かにこの地に立つて感じるものがある御留川から御川筋になる広い川の流れの勢いの中で、運送舟、魚とる舟、丸水の旗を掲げた藩の舟が動き、そこで働く人々も勢いよかつたことだろう。このお爺さんが子供の頃に聞いたという話しをしてくれた。

ある年のこと。しいの木山から切つた木を薪にし沢山舟積みして翌日の朝出る筈であつたが、突然の風雨で舟が傾き、薪は川にはうりだされ八木、高架津までも水面を覆つて流れたという。風雨が止んでからの後始末も大変だつたという。人々の様子が目に浮かぶようだ。この時の出来ごとは河岸は勿論、藩にとつても、人夫達にも大きな損害だつたという。

もう一つの話は果議だつた人の妹か娘が三ッ谷の河岸に嫁にくるといふので、自分の力を持つて台から三ッ谷への道をつくつたという。その上三日三晩の大盤振舞で賑わつたとか。その後だんだん此も廃れていったそう。

三ッ谷河岸を忍ぶものは、大きな屋敷位で御左衛門川の跡を知る人もなかつた。水はきれいだった。

たよ、沈んだ薪もよく見えて出来る限り拾ったという。

薪にした木のあったしいの木山は全く検討がつかなかった。椎の木が沢山あった所かな、地名かな、兎に角人に聞くことだと、田にいる人、畑にいる人にと声をかけた。

「そっちの山の方だ聞いたね」

と台の方を指す。こんな傾斜地から木を切ったのかなと不信に思う。

「この先の方だって聞いたよ」

というが、木々が茂り一向に分からない。坂を上りきると女の人が二三人いた。

「嫁にきたもんばかりだからわかんねえよ」

ある家で尋ねると、

「何でも谷津の向うの宍倉小学校の方の裏山だよ」

まだまだ遠かった。目の前には広い畑が目に入った。こんな広い畑が続いているのに驚いた。幸い通りかかったトラックの人に聞いた。若い人で向うに親父と御袋がいるので遙か先を指さした。苗木の手入れをしているご夫婦だった。この辺が「しいの木山」という所だと分かった。明治に入ってから三軒に拂い下げられた所だそうだ。その前は水戸様のものだったという。この辺一帯に木々が茂っていて、手入れもされていたという。開墾に開墾を重ねて今の農地になったという。息子が東京から帰ってきて後をやってくれる喜びを話してくれた。ここで切った木は薪になり、坂を下って三ツ谷河岸まで運ぶこともひと苦労だったろう。二百六十年前と現在が一枚の文書を通して繋がれた喜びの日だった。自然に逆らわずに生活していた昔の人達の姿、自然をこわして又造り直して

苦勞している今の人々の姿、どちらも人間の苦に変わりないように思う。

青屋箸 (二)

兼平ちえこ

当会報八月の六三号より青屋箸について今回は第二回目になります。

水戸市小吹町にお住まいの富田様の地区で行われている「青屋箸」について、石岡の青屋神社で行われている青屋祭との関連性を歴史的背景からふるさと風の会の打田さんに「青屋神社物語」として六三号に語って頂いた。それによりまずと富田様お住まいの小吹町辺りは室町時代中期頃まで府中(石岡)城主、大塚氏の領地であった事から青屋神社で行われた祭りがそのまま伝わったものと推測出来るとの事であった。そして、後日富田様が購入された「茨城の民俗」の中に更科公護著「常陸の青屋祭について」の貴重な資料があったとの事で届けて頂いた。民俗行事としての青屋箸について訪ねてみたいと思ひ、六三号「青屋箸」の文中後半からお伝えしていきます。

その続きから今回は始まります。

まず、その前に鯉鮓の起源について、武光誠著「食の変遷から、日本の歴史を読む方法」より抜粋してみましよう。

中国北部では古代に、すでに小麦粉を材料にした麵類が主食になっていた。それが奈良時代に唐菓子の一つとして伝わり、貴族の間で鯉鮓(うんとん)と呼ばれていた。しかし鯉鮓は貴族層には好まれません次第に廃れていった。そして鎌倉時代の日

本に、禅宗が広まる中で鯉鮓が再び禅料理の一つとして伝えられた。室町時代まで、京都の公家や僧侶は一日二食の食習慣であったが足利尊氏が幕府を京都に開いた事をきっかけに、武士の一日三食を、まねて、朝食、夕食の他に昼食に相当する点心(中国料理で食事がわりの軽い食品の総称)をとるようになり、饅頭、麵類、豆腐などが点心に用いられたが禅寺では、こねた小麦粉を細く切った鯉鮓が最も好まれた。この頃「うんとん」がまつて「うどん」と呼ばれるようになった。鎌倉時代以降、西日本で二毛作が広まり、麦が裏作で作られるようになったが、庶民の多くは小麦を粉にする調理法は知らなかったし、鯉鮓等の禅寺の点心の製法は秘伝とされ寺を訪ねる客に、他所では味わえない鯉鮓を御馳走することを通じて、中世の禅僧は信者の獲得を図ったそうである。中世の京都周辺の寺院は、俗人の入り込めない世界とされ、朝廷から多くの特権を与えられていた。また、僧侶が独占して地方に伝えなかつた文化も多かった。

織田信長による延暦寺焼き討ちは最大の寺院である比叡山の権威を否定した。この事をきっかけに京都周辺の寺院の閉鎖性は崩れ、寺院の持つ多様な文化が広まる事になった。延宝四年(一六七〇)に京都の町で鯉鮓の夜売りが始まったと記録されている。それは遅くまで働く町人の夜食とされた。京都の鯉鮓は、江戸の蕎麦のような御馳走として扱われたが、それに対して、大阪では屋台の廉価な鯉鮓が主流をなした。中世に禅寺の閉鎖された世界の中で発展した鯉鮓が、大阪でようやく庶民の食べ物になったそうである。

そして箸となる芭、茅、葦等については、神聖にして清く、身の穢れや災厄を払いのける靈力を

持つと信じられ、青屋箸は新しい季節を迎える大祓いの一方法であったとみられる。

以上の鯺鮓、箸についての事をご理解頂いて「茨城の民俗」より、常陸の青屋祭について

更科公護著

天保年間に刊行された新編常陸国誌の年中行事の項に「青屋箸」というのが載っているので引用してみよう。

六月に廿一日、青萱ノ箸ヲ以テ青物ヲ調シテ食ス、コレヲ青屋祭ト云フ、但那珂川以北ニコノ事ナシ、元コレ府中ノ青屋祭ヨリ出タリ、コノ祭ハ惣社ノ祭会ニテ、青屋馬場二細木小竹ニテ飯屋ヲ作り、青萱ヲ以テコレヲ葺キテ祭ル、ユヘニ青屋祭ト云フナリ、詳ニ神社部惣社条に云ヘリ、鹿島大宮司年中行事ニハ、コノ日茄子、瓜ノ類料理シテ、薄箸ニテ食ストアリ、青物ヲコノ日ヨリ用ヒ初ルノ意ナリ。

とあり、新編常陸国誌では青物をこの日より用い始めるとなっている。

では鹿島神宮ではどうかというと、青屋祭のいわれについては神宮にもはっきりした記録がなく、ただ文政六年（一八一三）北条時鄰の著した鹿島誌の中に「青屋」として次のように記されてある。

六月に廿一日、大神に薄の箸を供へ奉れり、之を青屋の神事といひて、里人まで家毎に薄の箸を用ひ、すべて茄子、瓜、豆のたぐひの青き初物を食ふことなり、俗のいひ伝へに、此日は神護景雲二年、大神春日御遷幸の日にて、春日にとどまり給うとき、忽のことなれば、御饌の調度などに、取りあへず、ありあひたる薄の箸に青物を供へ奉れるより起りて、その故事を伝

へたるよしいへり、按にそのいはれはとまれかくまれ伊勢の正殿の萱葺なるが如く、古風のかざらぬさまを今に残してかくはものせる事にもあるべし。

右によると、鹿島誌ではさらに伊勢の正殿がカヤぶきなので、古くより質素の風を今に残したものであろうとあって、青屋祭が何の祭りであるかはいずれもはっきりしていない。(続く)

常陸の青屋祭について、今回はここまでとします。尚、八月初旬、鹿島神宮の歴史に詳しい神主様に電話で伺いましたところ、青屋祭については、解らないということでした。むしろ奈良時代に国司の参拝が行われたかどうか疑問であるとのことでした。せめて「鹿島誌」だけでも確認できればよろしいですね。その節はお忙しいところを、お答え頂き有難うございました。

・まあいいころ灯しほおずきゆれた ちえこ

旅人(1)

小林幸枝

一日目、八月七日(日) 宮古島。

上空から宮古島を見下ろしたとき本当に言葉を失うほどショッキングな美しさに出合った。しかし、宮古島空港に着陸した時には上空からの美しさとは違い随分田舎だな、と思ってしまった。

宮古島では、まず人頭税石と仲宗根豊見親の墓を見学。次に西平安名三崎から池間大橋に…。海の眺めは素晴らしく、大神島が見える。

大神島は神の島と呼ばれており、神聖な場所

ある御嶽には近づくことも禁じられている。撮影が禁じられているところも多く、自由奔放勝手気ままに散歩することが出来ない。人口は二十名ほどで、ほとんどの人が高齢者。静かな島です。勿論コンビニだとかスーパーもありません。必要なものはすべて持参しなければなりません。神秘的な岩が沢山ある島でした。

東平安名崎から灯台まではサンゴ礁が広がっており美しすぎると言いたいほどの風景だった。白い砂浜と青い海。波打ち際の海水は透明過ぎる透明で、さらさらと流れています。

東平安名崎の断崖絶壁の入り組んだ海岸線の風景を眺めると、真っ青な深い色の海がどこまでも続いてあります。

童宮城展望台から見る来間大橋の全景も美しく、一枚の絵画の様でした。

砂山ビーチは、象の鼻のようになっており、白砂の山を登ると目の前に美しい海の色が飛び込んでくる。晴れていると海はガラスのような輝きを見せてくれるのだそうですが、この日は雲がかかりガラスのような海は見る事が出来なかった。

二日目、八月八日(月) 伊良部、下地島。

宮古島でレンタカーを借り、フェリーに乗って伊良部島地頭に向かう。下地島へは二十五分程で到着。

・オパオキ井戸：台風が通り過ぎたばかりだったので漁網・木くず・ブイの玉等が散らばっており、残念ながら見る事が出来なかった。

・フナウサギバナタ展望台：フナウサギバナタとは船を見送る岬という意味だそうで、成程海を見晴らせる良い場所だった。

・佐和田の浜：遠浅で静かな海で、大岩がゴロゴロと点在してあり非常に特異な景観を見せていた。

・下地島空港の外周りの海は、青く広がった海が遙か見渡せ、何時間眺めていても飽きのこない風景だった

・通り池：二つの池が水底でつながっていて海に通じているのだそうだ。繋がっているもう一つの池（なべ池）を見に行きたかったが、渡り橋が通行止めになっていて見られなかったのが残念であった。

・帯び岩：下地島の巨大岩で、この巨岩は1771年の大津波で打ち上げられたと伝えられている。上下が逆さまになった様は、その津波の凄さを物語っている。岩は高さ12.5m、周り29.9mもある。本当に津波が運んできたのなら東日本大震災の津波は想定外などではない。綺麗な海にいろいろな熱帯魚が泳いでいる。沖繩の海というのは全部が綺麗な幸福を湛えているのかなと思った二日目であった。

三日目、八月九日（火）多良間島。

宮古島から多良間島までは飛行機で二十五分。多良間島は自転車で回る予定で、バスでレンタルサイクル店へ行こうとしたら、バスが出てしまいが困っていたところ、消防ボランティアのおじさんが車に乗せてくれ、サイクル店まで連れて行ってくれました。感謝感謝です。

自転車で島内一周。島内のはほとんどはサトウキビ畑で、その他は牧場である。集落を離れるとサトウキビ畑と牧場なのでどこまで来たのか分からなくなる。みんな同じ風景なのだ。自分の方向が

分からなくなったら北側の八重山遠見台近くの二本の電波塔を探し、自分の位置を知ることが出来る。真夏の沖繩の太陽の下、自転車で島内一周は空気は旨く、汗と一緒にたまったストレスを流し落してくれた。

沖繩夏休み旅人は十月号に続きます。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第三章 因果応報の範囲（4）

諺にも「来年の事を言えば鬼が笑う」と言うから人間は自分の未来を予見出来ない。近頃はテレビや雑誌で「あなたの運勢」などと生まれ月や星座や干支の区分で適当なことを言っただけで商売をしている連中がいる。お遊びならまだしも、僅かな事件で人間の運命が画一化される道理が無い。科学の発達で気象情報などは長期の予測が可能ならしいから、その程度で感心していたほうが無難なようにだと自分の未来が見えない私は予感している。

現代は情報が氾濫しているので、例えば就職などは的確な資料で冷静に判断すれば自分の将来図が或る程度は見通せるかとも思うが、昔の官僚や武士などは自分が仕える主君の先行きを判断する材料は現時点での栄華しか無い。順風満帆だと安心していた高官が或る日、突然に罪人にされた例は日本の歴史でも多くある。将来ともその家臣で居て良いかどうかの判断が難しい。また栄枯盛衰

が激しいと、ダメだと思っただけで見放していた人物が何かの間違いで偉くなったりするから余程、慎重に決めないと後で苦労することになる。

歌舞伎の「一谷嫩軍記（いちのたにふたばんき）」などで知られた熊谷次郎直實は石岡にゆかりのある平貞盛から六代目の子孫と称しているが、祖父と父の代に追われて頼った親族の地・熊谷を本拠とした。直實は平治の乱では源氏に付き乱後に上手く立ち回って平家に仕えた。源頼朝が石橋山で挙兵した際には敵方になり、やがて時流に乗って源氏に従ったため所領も減らされている。

熊谷直實の活躍が認められたのは、源頼朝が石岡まで来て奥久慈の佐竹氏を討ったときのことになる。一の谷の合戦では何とかして手柄を立て熊谷の名を顕したものと、息子と共に「一番乗り」を図った。しかし同じようなことを考える奴が居て平山武者所季重という武士も一番を狙っているらしい。先を越されてなるものかと、熊谷親子は未だ暗いうちに一の谷の平家陣営に押しかけた。「源平盛衰記」によれば、直實は此の日の為に権太栗毛（こんたくりげ）と言う名馬を岩手県から買ってきたらしい。平家の陣の大門の前まで行き大音声で名乗りを上げたけれども大門は未だ閉まっていた。攻めてきた敵でも受け付けない。優雅な平氏の御曹司たちは、戦場でも伎楽やら管弦に夜を過ぎしているから朝寝坊なのである。

「やあやあ、我こそは武蔵国の住人・熊谷次郎直實、同じく小次郎直家・生年十六歳、伝えても聞くらん、今は目にも見よや、日本第一の剛の者ぞ、我と思わん人々は、楯の面へ蒐出でよ（たてのおもてへかけいでよ）出て来い」と叫んだのだが、眠いところを早々と起こされた平家の軍兵は怒って

いるから折角、名乗りを上げて誰も返事さえもせずに櫓(やぐら)の上から矢だけ射掛けて相手にしなかった。名前を覚えて貰わないと早起きが無駄になるので、熊谷父子は敵に向かって散々に悪態をつけて引き返し、夜が明けてからもう一度、敵陣に押しかけて名乗りを上げた。

そこまで苦勞をして二度も大声を出したのだが二度目には競争相手の平山季重も同時に敵陣に乗り込んだから「一番乗り」を決める際に「どちらが先か…」で揉めた。結局は「木戸口までは熊谷が一番：城の中へは平山が一番、手柄も平山が一番…」という裁定がくだり、熊谷父子の早起きも二度名乗りも無駄になってしまった。平山季重が城の中へ突入した際に、守る平家方では一緒に来たのが朝早くから怒鳴り回していた熊谷直實だと知って「イカレタ奴！」と恐れたらしい。熊谷直實は自分で「日本第一の剛の者…」と言ったが、これは余程、自信が無いと言えない。

戦国時代に新興勢力の織田信長と徳川家康の連合軍は長篠の合戦で無敵を誇る武田の騎馬軍団を撃破した。武士の手足に過ぎなかった足軽の鉄砲隊が、一躍して合戦の主役に躍り出たのである。それまでの合戦では武士と武士とがお互いに名乗り合い、相手を確認してから勝負を挑んだのである。その場合に熊谷直實のように「日本一」だと言って貰えれば、討ち負かせて首を取った時に「これは日本一の誰々の首です」と申告できるが何処の誰とも分からない敵では相手にして貰えずまた無名の者だと合戦の前に「やあやあ、我こそは…」と名乗りを上げて、相手に「知らん！」と言われて恥をかくおそれがある。

そこで武士たちは相手を威嚇する意味もあり自

分の祖先や親類縁者から一般に知られた人物の名前を出して名乗りをあげる。熊谷直實も本来ならば「恒武平氏平貞盛六代の後胤…」と言うところなのだが、戦う相手が恒武平氏の出世頭なので都合が悪いから自分を日本一にして誤魔化した。引き合いに出されるのは早くから合戦に登場していた源氏と平氏が主力であったろうが、橋氏とか菅原氏、大江氏、紀氏などの名族もあり、また日本中に雑草のように広がった藤原氏も多かった。地方官に任官し土着し武士化していたのである。

平治の乱で死罪を免れ伊豆へ流された源頼朝の監視役にあてられた伊東・北条の二氏のうち北条氏は前編で触れたように八幡太郎義家の母方祖父である平直方の子孫を称していた。熊谷直實も同じ系統である。直方の祖父は維将(これまき)で、多分、その弟が維衡(これひら)であり、其の子は正度、以下、正衡、正盛、忠盛、清盛と続くのが天下を取った平氏であるから、恒武平氏の流れで言えば熊谷直實や北条氏らのほうが本流かも知れない。伝えられる系統が本物であれば…の話だが…系統はどうでも北条氏は、三代で滅びた(正確には滅ぼした)源氏の後を継いで十六代も続いた執権として日本を支配していたのである。

この話は、源頼朝を中心として源平時代に登場した人物の因果関係を探ることを目的に、前編ではその意に反して「平氏打倒」の中心人物にさせられた頼朝の行動について触れた。少年時代に平治の乱の敗戦で命が無いところを、平家方の何人かの人たちにより助命され伊豆に流された頼朝は刑務所の施設が無く、監視付きながら比較的自由な暮らしをすることが出来た。そのうちに頼朝も立派な大人になった。一応は囚人であるから就職

する訳にはいかないが、贅沢を言わなければ昔の乳母やその縁者たちが生活を支えてくれている。

冒頭に述べたように、将来を予見することは出来なくても、いずれ平氏から「赦免」されたら田舎侍として伊豆か相模か鎌倉近辺に居る源氏ゆかりの武士の家に婿入りして暮らそう…ぐらいの人生設計は立てていたと思われる。平氏全盛の時代であるから源氏の再興などは夢のまた夢である。周りの人物も、まさか、この囚人が平家の政権を倒すなど思いも寄らないから、当時の頼朝に関する記録など誰も残していないのである。

鎌倉幕府の公式記録である「吾妻鏡」の書き出しは、前編で述べたように「平家打倒」を促す以仁王の令旨を受けながら決心がつかなかった源頼朝が、その出来事の故に平家から命を狙われることになり「窮鼠猫を嚙む」ような状況で平家方の出先機関(伊豆の代官 山木(平)兼隆を襲撃するところから始まっている。その時の頼朝の年齢は三十代に入っているから、伊豆に流された十四歳からの二十年ほどは何も分からないことになるのだが、偶然に或る出来事が起こり、それが「曾我物語」としてまとめられた。その関わりで青年時代の頼朝についての断片的な記録が残された。

実情はともかく、人間社会が形だけでも理知的になった現代では「仇打ち」など犯罪に分類されてしまいが、かつて「日本三大仇討ち」と称されたのが忠臣蔵と鍵屋の辻の決闘(剣豪・荒架又右衛門の活躍と富士の裾野の仇討ちであり、俗に「一に富士、二に鷹の羽の食い違い、三に上野で花を咲かせる」と言われて曾我兄弟による富士の裾野の仇討ちが筆頭に挙げられていた。なお「鷹の羽の食い違い」は浅野の家紋であり「上野」は鍵屋の辻

人を奈良・飛鳥の川原寺にぶち込んで食事を与えなかった。優しい天皇であつたらしい。死罪を免れた源頼朝でさえ何とか飯は食わせて貰つていたのに：一週間ほどして空腹に耐え兼ねた母子は毒を飲んで死んだことになつてゐるが、食事も持ち込めないのに毒を入手出来る筈が無いから、毒殺されたと考えるのが妥当であろう。陰謀の裏には薬子の変との関わりも推測されている。この事件で大納言であつた吉子の兄・雄友(かとも)は失脚して流罪にされた。ただ雄友は敵が流した謀反の噂を早く耳にしながら、その対応を誤り政敵に利用されたような節がある。これで藤原南家は中央政界の主流から外されてしまった。

その雄友の子は弟河と言ひ、辛うじて地方官僚の座に留まり、以後、何代かの子孫も中級官僚で終つた。その中の一人が中央官庁の木工寮(もくりょう)で次官を務めてから駿河国司になつた。

木工寮は「こたくみのつかさ」とも言ひ、御所の造営と材木調達が主任務で、大工さんなどお抱え職人を管轄する任務がある。江戸時代なら最も賄賂の多い部署になる。当時は御所の火事が頻繁に起きていたから、名前はパツとしないが重要な職務である。それ以後は地方官に留まつたために、昔はみやこびとであつた記念に本姓を「工藤」とし伊豆伊東に土着したので「伊東」も名乗つた。

源氏と平家が肩を並べていた時代に、家督を継いだのは工藤家継という人物である。経歴は不明ながら工藤大夫と称しており、伊豆の押領使(おうりょうし)凶悪犯や暴徒鎮圧の任務を帯びた国府役人を務め、名前も祐純、祐隆など複数が伝わっている。沢山に居た子供のうち男児は早世してしまい、一人残つた孫が問題の伊東祐親なのである。(二説では娘が

生んだ子とする)一方、家継の妻も早くに亡くなり、子連れの女姓と再婚していたのだが孫が生まれるより前に、再婚した女性では無くて連れて来た娘に男児が誕生していた。この娘は嫁に行かず、ずっと家にいたから生まれた子の父親は工藤家継だと誰にも分つた。勿論、本人たちにも：名前を祐継と言う。

伊豆半島の熱海から先、相模灘に面した沿岸部にある宇佐美、伊東、河津の三か所は「楠美(くすみの庄)」と呼ばれており、家継は其処を本拠としていたが、仏門に入つて「楠美入道寂心」と号した。ワンマンで頑張つてきたけれども将来のことを考えて領地を分けることにしたのである。

その際に連れ子が生んだ(家継が生ませた)祐継を嫡子として伊東一族の惣領に据え、広い伊東領を与えたのである。既に都に登らせ箱を付けてあるから「工藤武者祐継」として後継者に指定したことになる。そして孫は祐継の弟分として「河津次郎裕親」と名乗らせ河津領を与えた。

この人事は当然と言へば当然のだが、世の中の優劣がつくと劣つた方は現実を素直にとらない。寂心翁さんは、安心して彼の世へ行つたけれども、自分が楠美の正統だと勝手に思い込んでいた河津祐親は悔しくて堪らない。兄とされた祐継を祖父の後妻の孫で他人としか見ていないから伊東の家が取られたと思つてゐる。これは間違い無く家継の子なのだが証明するのは難しい。

「どげんかせんといかん！」と思つた祐親は、皇族や先祖の藤原氏が盛んに使つていた「呪詛による調伏」を思いついた。京都ならば陰陽師の安倍晴明が経営する会社に頼めば済むのだが伊豆には専門店が無い。そこで神仏混淆の聖地・箱根の

権現に委託することにして祖父の法事とか何とか口実を設けて箱根山の別当を屋敷に招き、宴席を設けて接待をした後で「折り入つてお願いが：」と切り出したのが、工藤祐継を呪詛して殺害するという相談である。当然、報酬は高く払うということでの話であるが、さすがに社寺の別当であるから「承知しました」とは言わない。慌てて道徳教育の初歩を述べて断り、箱根山に逃げ帰つた。

しかし、これで引きさがる祐親ではない。自分が箱根山の有力檀家であることを強調し報酬の金額を増して執拗に食い下がつたから、別当も根負けして呪詛調伏を引き受けざるを得なくなり呪い道具を持つて祐親の屋敷に泊まり祈祷を始めた。

通常は：と言うのも変だが、誰かを呪う場合には対象者を苦しめて命を奪うように祈るのだが、箱根の別当も良心が咎めるから「：どうか工藤祐継の命を縮めるように、しかし地獄へは落とさず、極楽往生させ給え：」と訳の分からない祈祷をしたよう、頼まれた神仏も理解に苦しむから二週間ほどかかつてやつと通じた。

河津祐親にとつては、自分が伊東一族の頂点に立ち広い領地を手に入れる為の御祈祷であるから金に糸目をつけなかつた。阿弥陀三尊、地藏菩薩一家を始めとして金剛童子から夜叉王まで仏教界の幹部が総動員されて伊豆に來た。箱根の別当も不眠不休で祈り続けたので意識朦朧としてゐる。

或る日、不動明王が剣で工藤祐継の首を貫く夢を見て納得し大丈夫と妙な自信で引きあげた。宇宙旅行が実現する時代に呪詛の効果など信じる者は居ないが、平安時代の末期であるから少し風邪をひいて寝込んで、それが何かの祟りだと思ひ込むことは有るかも知れない。

或る日、大勢の仏様に見込まれていた工藤祐継は、それとは知らずに数人の家来を連れて伊豆の奥山へ狩りに出かけた。合戦に備えた射撃(弓矢)の訓練である。馬が乗り入れられない山中では登り降りに汗をかく。深山では気温が急に下がる。それが原因で、屋敷に帰ってから熱を出して寝込んだのだが祐親の呪詛効果が出たことにはなる。祐継はインフルエンザ伊豆型の予防注射をしていなかったために、肺炎を併発して重態に陥った。

そこで九歳になった嫡男の金石丸を枕許へ呼び、手を取って「幼き汝を見捨てて別れることは無念なれども生死は逃れ難く、心残りである…」と嘆いているところへ、普段は不平不満で寄り付かなかった河津祐親がやってきて、金石丸の肩に手を置き「…兄者には今を限りとこそ見えさせ給ひて候へ。今生の執心御止め候へ。来世こそ大事に候へ。ひとすじに後生を願ひ給へ。かないし殿においては、祐親かくて候へば御心安く思しめされ候へ。後見仕るべし。ゆめゆめ疎略の義あるべからず。さればにや史記の言葉にも、昆弟(こんてい)兄弟の子猶し己が子のごとしと見えたり。いかで疎かになるべし(曾我物語)」と言った。

「兄さんは、もう終わりだから未練たらたらししていないで、自分が行く彼の世のことだけ考えなさい。(さっさと死になさい)後は私が付いているから安心です。残された金石丸の面倒は自分の子と同じ様に大切に見ますから…」と凶々しくも言い放ったのである。これは自分が箱根権現に頼んで兄である祐継を呪い殺そうとした自信である。此の場合、一般史書に従って、息子の名を「金石」としたが原本では「かないし」としており、これを「愛児(子) かないし」と解釈する説もある。

言われた祐継が健康であれば祐親の野心を見抜くのだが、正に御臨終寸前であるから「息子の将来を見てくれる」と思い込んで祐親を拝み「只今の仰せこそ何よりも嬉しく候へ。日頃は何となく義絶申事によつて、何事もおろかなるようにな覚え候つるが、かように宣ふこそ返すとも本意なれ。さあならば、かないしをば和殿にお預け申す。甥なりとも実の子と思ひ給へ。女(娘)あまた持ち給ふ中に、萬劫御前に合わせて、十五にならば男になし、当荘の本家小松殿の見参に入れ伺候させて、和殿の女とかないしと、この所、他の妨げなく知行させよ：(曾我物語)」と遺言した。

さらに領地の権利書を出させて母親に渡し十五歳になったら息子に譲るように言い残し、以後は河津祐親を実の親と頼み、意に添うように孝養を尽くすべしと遺言をした。そして数日後に祐親が呪詛したように息絶えた。妙なところで呪いの効果を信用した祐親は、約束通り父親代わりとして河津の館から工藤総本家に来て、あれこれと家臣に指図し、葬儀万端を取り仕切り、表面上は故人との約束を忠実に実行しているように振舞った。

金石が十五歳になった時に、祐親は烏帽子親として昔の成人式である元服を済ませ「宇佐美工藤祐経(うさみのくとうすけつね)」と名乗らせた甥を自分の娘の萬劫御前と結婚させてから権威づけのため都へ上らせた。かつて池禅尼が望んだ頼朝少年助命を平清盛に取り次いだ平重盛に託したのである。そこから派遣社員のような形で、院と呼ばれる上皇や法皇の御所を警護する武者所に就職が決まった。その段階で、祐経が相続した領地の権利書は父親の遺言どおりに母親から祐経に渡されたが祐経は確認してから母親に預けて置いた。金庫

が無い時代であるから館を仕切る叔父が見たり書き換えたりする機会は出来てしまったことになる。六年間、良い叔父として仮面を被ってきた河津祐親は最初の狙いどおりに楠美の頭領となる野望を徐々に実行に移し、自分が伊東(工藤)の当主であるように振舞い始めた。本来ならば伊東の相続者となる祐経を数年の奉公で都から呼び戻すところを無視して放っておいたのである。

都に残された工藤祐経の方は「誰教ふるともなきに、公所を離れず、奉行所において見えをうたせ、沙汰の善悪を分別して理非を迷わず。諸事に心を互(わ)たし、手跡普通を超え、和歌の道に心をかけ、遊宴の筵(むしろ)に推参してその衆に列(ら)なりしかば、工藤の優男とぞ召されける」と曾我物語に記録されたように、仕事の覚えが良く真面目で、礼儀正しく姿形に気品と威厳があり、物事の判断が適確で公平で、細部にも目が届き、その上に字を書かせれば美しく、和歌の道にも通じていたので高貴な人たちにも気に入られ、その集まりにも列席させて貰い優雅な遊びごとなども教えて貰った。その為に男ぶりが優れた武士ではあるが「工藤の優男(やさおとこ)」と呼ばれて誰からも一目置かれる人物になった。

十五歳で伊豆から出てきて二十一歳の時には大抜擢により武者所の一臈(いちろう)に任命されたので、その名を工藤一郎祐経と改めた。

祐経が二十五歳になったとき、国許に居た母親から一通の便りが届いた。それには病気で明日をも知れない命であることが書かれてあり、その続きに祐経が相続した領地を叔父の河津祐親が自分のものにしていく事実が述べられていた。母親は権利書を同封してよこしたが祐親は領地を実効支

配していたのである。祐経は伊豆へ戻ることを考えたけれども院の警護と言う職務の責任者であるから簡単に休暇はとれない。その間に母親は他界してしまった。そこで祐経は、自分に仕える家来を名代として伊豆に差し向け、河津祐親に権利書を見せて遺領の返還を要求した。

祐親のほうは伊東の領地が欲しくて、祐経の父親を呪い殺したほどであるから、現代の日本の周辺に出没する国々のように領土返還などと言う言葉は辞書に載っていない。「育てて貰った恩も忘れて何を言うか：権利書が有つても、事実上は此の祐親が支配しているのだから此処は俺の土地である！」と言って祐経の郎党を追い返した。

父親代わりと思い信じ切っていた叔父の変心に驚いた祐経であったが、領地を失うことは武士にとって死活問題である。自分が伊豆へ行き叔父に談判することを考えたがそれでは家臣を巻き込んだ争いになる。そこで事情を文書にして主筋の平重盛に見せ、添え状を貰って検非違使に訴えた結果、河津祐親が被告として都へ召喚された。ところが、世情に長け箱根権現を金で買収した祐親であるから検事、裁判官、弁護士から裁判所の門番にまで賄賂を配って回ったから何時まで経つても裁判が開かれない。呆れた祐経は裁判開始の催促状を出した。それが仁安二年（一一六七）二月のことである。平清盛の娘・徳子が高倉天皇の後宮に入る数年前のことであるから、平家の威光も未だ全盛には至らない。重盛の息がかかった祐経も賄賂には叶わなかったようである。

工藤祐経から裁判の開始を督促された司法関係者は、さすがに慌てて会議を開いた。そこで裁判が開かれる筈なのだが状況は百%、被告側の河津

祐親に不利である。どうしようかと悩んでいる折に被告側から再度、賄賂が届いたから一同の協議は結論に達した。「明解な」と言うにはお粗末な、小学生でも出来る判決として「問題の土地を二分し双方が半分ずつ」と言う最低な裁定を下した。裁判の対象になったのは祐経が相続した領地であるから河津祐親が貰っていた分は其の俛で、それに祐経の伊東領半分が加わる。そこは既に祐親が全部を実行支配しており、返還される保証はない。

河津祐親は大喜びで、さつさと特急列車で伊豆へ帰っていったけれども、工藤祐経のほうは収まらない。にも関わらず伊豆へ戻った祐親は、自分が訴えられたことを根に持ち、祐経に嫁がせていた萬劫御前を強引に離別させ、土肥弥太郎遠平を婿としてしまった。もはや、河津祐親は完全な敵になったのである。これは工藤祐経にとって全財産を失い、都における武士の地位さえ失う事態に陥ることになる。完全な消費社会である都で武士としての華やかな生活を送るには伊豆からの仕送りが不可欠である。それが途絶えてしまう。

祐親が抱いた野心と欲望には呆れるばかりであるが此処で祐経に未来を予見する能力があったならば、その行動も運命も違ったものになっていたであろうと思う。やがて伊豆に流されていた源頼朝の存在がこの一族に大きく関わってくるのだが先の見えない祐経は次のように考えてしまった。

十五歳から武者所に出仕して日夜の奉公を厭わず十年勤続にも及ぶ時期に恩賞を受けるさえ不思議では無いのに、先祖から受け継いだ領地の半分を召し上げられるとは如何なる仕儀であろうか：それもこれも憎き河津祐親のなせる業、この恨みは何としても果たさねばならぬ：然しながら…。

かつて父親の祐経を呪い殺されたことは知らないからそれ以後で言えば、憎む相手の河津祐親は曲りなりにも工藤祐経にとって育ての親であり、元服の烏帽子親であり、妻の親であり、また肉親の叔父にもなる。領地を奪ったとは言っても祐経への仕送りは続けていた訳でもあるし、そこは堪えて都での奉公に努めていれば祐親との関係も保たれたし、妻の萬劫御前を失わなくても済んだ。

何よりも、後に富士の裾野で曾我兄弟に仇討で暗殺されることも無かった：やはり武士は領地にかける執念が強く仕方が無かったのか：余計なことだがそのように理解していた。ところが是までに伝えられている事件そのものが怪しいようで、曾我物語にある工藤祐経が恨みを持って河津祐親を狙う話辺りから、どうも年代の合わないことが出てくる。祐経と祐親と、伊豆の小豪族であった一族に内輪同士の争いが有ったことは事実であろうけれども、その内容は日本の歴史に残す程のことでは無かった。何者かが（分かってはいるのだが）大きな陰謀を仕掛けて見事に失敗したので後世にそれを隠す目的で「曾我兄弟の仇討」を創作したのではないだろうか：それはそれとして、河津祐親に騙された工藤祐経のほうだが、なぜ「仇」として狙われたのであろうか、曾我物語の嘘を忠実に再現すると次のようなことになるのである。

武士の命でもある領地を失い、妻も奪われた工藤祐経は当然ながら職務も疎かになる。武士の勤務は肩書づくりの勤勞奉仕のようなところがあるから、国許からの仕送りがなければ経済的にも困窮して都に居られず、遠い親戚を頼って駿河国に来た。事情を聞いた人々は祐経に同情し、伊豆から来た家来筋の者を含めて数百人の支援者が祐親

の悪行を非難した。この噂が伊豆の祐親の耳にも聞こえたから復讐を恐れて暫くは警戒していた。

その頃、流罪の身で伊豆の蛭ヶ小島に居た源頼朝は、比較的自由的な日常を過ごすことが出来るようになり近辺の武士たちとも親しくなった。曾我物語に「その比(ひ)兵衛佐殿、伊東の館にましましけるに…」とあり、大庭景信の発案で近辺の武士たち五十余人が伊東館に押し掛けて大宴会を開き頼朝を慰める。そこから話が弾んで伊豆の山奥で狩りを始める―これが大嘘である。兵衛佐(ひょうえのすけ)は頼朝が平治の乱に出陣した際の官職であるが、徐々に述べる理由で、頼朝が伊東の館に居住することはあり得ず、ましてや武器を使つた実戦訓練の狩りに流罪中の頼朝が参加出来る訳が無い。曾我兄弟による富士の裾野の仇討の発端は、この狩りに際して起つたのである。

工藤祐経の家臣に大見小藤太、八幡の三郎と言う者が居た。河津祐親への恨みを抱えて悶々とした日々を過ごす主君の為に、何とかして仇を討ちたいと近辺を探っていた。折しも武士たちが伊豆山中での狩りを催すことを知り、この時こそチャンスとばかり、動物を追い出す勢子(せし)の募集に応じて狩り場で祐親を狙うことにした。話の嘘も数字が入ると本当らしく思えるが、この狩りでも犠牲にされた動物は猪が三百、鹿が五百、熊が三十七、貉・狸が三百、その他の山鳥、狐、狼などが七百で合計一八三七と記録されている。当時の自然が豊かであったことは分かるが嘘八百を差し引いても一千以上の動物が命を落とした…南無阿弥陀仏―繰り返すが、もし、この狩りが行われたとしても源頼朝は参加していなかった。

【風の談話室】

前月号まで、「この「ナー」を風の談話室としていたのですが、今月号より「風の談話室」と改称させてまいります。

先月号にお話ししましたように、美浦村の陸平をヨイシする会の皆様からご投稿いただけるようになり、この談話室の中に「ヨイシな話」「ナー」を新設し、掲載させて頂こうと思ひます。

当会の勝手な願いであるがこの談話室の中にふるさとを自慢する方達の「おらが国自慢や日々の雑感」などが○○「ナー」として、たくさん載せられるようになることを嬉しく思っております。

《「ヨイシな話」(陸平をヨイシする会)

『老いと向き合つて』

田島早苗

毎月、ふるさと「風」をお送り頂き有り難うございます。

楽しみにしていた二月六日の縄文の森コンサートでの素晴らしい出会いに感激して、私にもまた何かが生まれそうな予感がしていた矢先、三月十一日のあの大地震が起きました。

現在のことはとても思えない津波の映像におのき、その無残な爪痕が映し出されるテレビに涙しながら、突然、国民学校六年生の時に遭遇した空襲の恐怖が蘇ってきました。

岐阜の上空襲で丸焼けになった我が家では母方の祖父や母の従姉妹が爆死、父と母も怪我をして

動けない状態でした。着る物も食べるものもすべて無くしたけれど悲しみに浸っている暇もなく、子供ながらも、「私が頑張らなくては」と、隣の小母さんに連れられて焼け跡を漁りに出かけました。信用組合(今の農協)の倉庫の、燻り続ける中から焼け残りの米や味噌を探してどの様にして持ち帰ったのでしょうか? その辺の記憶が曖昧ですが、せつかくの戦利品も焼夷弾の焼け焦げた油のおいが染みついていても食べられなかったことだけは覚えています。燻り続ける一面の焼け野原に転がる牛や馬や人の死骸、小川を流れてきた水膨れの遺体、深く閉じ込めたはずの十二歳の少女の暗い記憶が震災の映像と重なり、涙が止まりませんでした。

地震、津波のダブルパンチだけでは終わらず、原発事故の恐怖が加わり、パニックになってしまった私は、何も手に付かぬまま、読書三昧の日々を送っていましたが、虚しい心は癒やされません。まるで鬱状態です。これが老いるという事なのかも知れませんか。

あの日から半年あまり、悲しみを乗り越え、どん底から立ち上がった人々の姿が放映されるたび、私の胸に小さな灯がともり、その空洞を埋めてくれます。

昔から日本の庶民は、踏まれても蹴られてもしぶとく生きてきました。施政者の非をいくら唱えてもどこのつまりは自分の頑張りしかないのです。世界中が日本の復興を見守っています。踏み出した第一歩が自分を変え、周りの人を巻き込んでゆくそんな若い力を期待するのも、やはり老いの繰り返り言なのでしょいか。

自分の老いを認めることの難しさ、客観的に見

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

ふる里とは、物語の降る里です。ふる里に降り落ちた物語は未来への道標。

守るべきは里に降り落ちた物語を確りと伝えることです。ことば座は、里に降り落ちた物語を朗読と手話を基軸とした舞(朗読舞)に表現し、明日の夢を伝える劇団です。

第21回公演(11月11日~13日)

常世の国の恋物語百:第28話

「湖の弦音(仮題)」

第21回公演は、脚本家白井啓治の念願であったギターでの朗読舞を…が実現!

ギタリスト大島直氏を招き、クラシックギターの弦音に(フランシスコ・タレガより選曲)のせ、常世の国の恋物語

「湖の弦音(仮題)」をお届けします。

前回第20回公演でモダンバレエの柏木久美子さんとの共演により一回り大きくなった小林幸枝の舞にご期待ください。

ことば座 315-0013茨城県石岡市府中5-1-35

☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

オカリナ奏者野口喜広と脚本家白井啓治の

第2回 里山と風の声コンサート

9月11日(日曜日)開演 PM3:00(開場 PM2:30)

常世の国へふらりと迷い込み、雑木林と風に語りかけるしか術を持たぬ瘦男白井啓治と常世の海と陸に魅せられ大地に母の詩を土笛(オカリナ)に声する夫(つま)野口喜広と妹(いも)矢野恵子が出会い一緒に風に声することになった。

『土笛(オカリナ)が奏でる《5億年 生命の旅》』

日本最古のカンブリア紀の地層(日立市)から、一握りの生命のかけら(土)をいただき、土笛として奏でる。土笛は何を語るのか…?

《演奏曲目》海はふるさと、カンブリアの夢、モンゴルの風、荒野、グレートスピリッツ、
旅立ち、浜辺の歌 他。

《演奏者》野口喜広(オカリナ) 矢野恵子(キーボード) 及川克洋(ウッドベース)
田中文彦(ギター) 山下亮江(パーカッション)

『朗読ふるさと物語《新説柏原池物語》』

奇想天外!

「龍神山の龍は、何と大山猫だったとは…」

ふるさと石岡に伝えられてきた龍の伝説に、新しい命を吹き込むべく脚本家白井啓治が新説として書き下した物語を、作者本人と石岡市(旧八郷)出身の声優永瀬沙知が鎖連読というスタイルで語ります。

コンサート料金 入場券 ………3,500円

(事前にご購入の場合は3,000円) 小学生 2,000円

ギター文化館 Tel 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628